

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	インドネシアにおける三日月形頭光を有する尊像について
Author(s)	伊藤, 奈保子
Citation	史学研究 , 305 : 265 - 281
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055693
Right	
Relation	



インドネシアにおける三日月形頭光を有する尊像について

伊藤 奈保子

はじめに

イスラーム化以前におけるインドネシアの宗教については未だ詳細が明らかになっていない⁽¹⁾。しかし、近年、特に日本において鑄造像・石像・レリーフ等と、経典・儀軌等の文献資料との照合による研究が進み、密教についての解明がされつつある⁽²⁾。筆者はインドネシアの鑄造像、約1000軀を資料収集し、それらを確認したところ、尊像の頭部背後に三日月形を有する作例があることに気づいた。また、石造の単独像、現地寺院のレリーフに彫刻された尊像の頭部背後にも同様の三日月形が施されている作例を確認することができる。この形状についての記述は図録の説明にとどまり⁽³⁾、管見の限り詳細をのべ、論証した先行研究は見当たらない。そこで、本論では、頭部背後の三日月形を「三日月形頭光」と名付け、この頭光が施された作例を現段階で確認できる範囲で紹介し、インドネシアの尊像においてどのような意味があるのかを考察することとした。三日月形頭光を有する尊像に規則性を見いだすことができれば、ある程度の尊名同定を行うことが可能となり、インドネシアの宗教美術の研究が進展するものと期待できる。

1. インドネシアの宗教美術

さて、まずインドネシアの宗教美術について簡潔にのべておきたい。インドネシアは、海路によりインド文化が伝来し、東南アジアのなかでも最も早くインド化した地域と考えられている⁽⁴⁾。プールナヴァルマン (Pūrṇavarman) 碑文⁽⁵⁾ から、5世紀頃にはヒンドゥー教が伝播していたことがうかがわれ、7～8世紀頃の西部ジャワ地域にはヴィシュヌ像⁽⁶⁾もみられる。また同時期、中部ジャワ地域においてもシヴァの聖地である7～8世紀頃とされるディエン高原 (Dieng)、9世紀頃建立のチャンディ・ロロ・ジョングラン (Candi Loro Jonggrang) をはじめとするヒンドゥーの寺院建立、造像が行われ、8～10世紀頃のマタラム朝を絶頂期に、イスラーム化される15世紀頃までヒンドゥー教の文化は続く。

次に仏教も文献資料から5世紀前半には伝わっていたと考えられ⁽⁷⁾、7世紀頃にはスマトラに石造の如来立像、観音菩薩立像⁽⁸⁾が出土している。8世紀の中部ジャ

ワ、Kalasan 碑文⁽⁹⁾では、シャイレンドラ朝のパナンカラナ (Panamkaraṇa) 王が密教の Tārā (女神) を祀るとあり、密教的要素もうかがえる。また、チャンディ・ボロブドゥール (Candi Borobudur) 等の寺院建立と造像が行われ、この時期、大乘、密教が信仰されていたと考えられる。

すなわち、インドネシア、ジャワ島では、8～10世紀頃に、中部ジャワ地域を中心に、マタラーム朝とシャイレンドラ朝の2つの王朝のもと、ヒンドゥー教と仏教(大乘、密教)が同時期に併存形態で信仰されていたと考えられる。その後、政権は東部ジャワに移行してゆく。この王朝がインドネシア美術史の区分の指標となり、8～10世紀頃の中部ジャワ地域を中心とした「中部ジャワ期」、10～15世紀頃の東部ジャワ地域を中心とした「東部ジャワ期」とされている。「中部ジャワ期」はインド要素を強く反映し、グプタ期後期の高水準な作例が多く、インドネシア美術史のなかで、最も爛熟した時期であったとされる。一方、「東部ジャワ期」では、王を神格化した像が制作されるようになり、霊廟としての寺院建立が行われ、規模も縮小化し、美術も土着化が進んでジャワ独自の傾向が顕著となってゆく。こうした区分のなかで、石像、鑄造像、法具といった美術作例は、8～15世紀頃にかけて、ヒンドゥー教と仏教(密教)が常に混淆した形で展開してゆくと考えられる。本論でとりあげる三日月形頭光は、この「中部ジャワ期」を中心とした尊像のなかにも多く見出すことができた。

2. 寺院のレリーフにみる三日月形頭光

まず三日月形頭光が確認できる寺院のレリーフについてのべたい。中部ジャワ地域、クドゥ (kedu) 盆地のプロゴ (Progo) 川とエロ (Elo) 川が合流する一帯に広がるチャンディ・ボロブドゥール遺構群に、それをみることができる。

チャンディ・ボロブドゥールであるが、建立時期については諸説があり、現存する仏像の彫刻様式と建造物に刻まれたカウイ文字(古代ジャワ語)、碑文等の考察から、サマラトゥンガ (Samaratungga) 王の代が主となってシャイレンドラ朝の8世紀後半から9世紀中頃建立の仏教寺院と考えられている⁽¹⁰⁾。

この寺院の第一回廊主壁上段には『方广大莊嚴經』に基づく仏伝図が彫刻されており、そのなかの「誕生」、「養母による養育」(図1)、「阿私陀仙人が太子の吉兆を占



図1 「養母による養育」部分

インドネシアにおける三日月形頭光を有する尊像について（伊藤）

う、「大自在天王が太子を讃頌する」、「太子の寺院行啓を議定する」、「太子が寺院行啓のために宝輦乘坐する」、「太子が寺前で諸神に礼拝する」などの場面に、幼児・童子の太子に三日月形頭光を確認することができる⁽¹¹⁾。

「仏の誕生」はルンビニーにおけるマーヤーの右脇出生であり、七歩歩行をするガウタマ・シッタールタ（Gautama Siddhārtha・瞿曇悉達多。太子と称す。）⁽¹²⁾の後頭部に欠損が著しいが三日月形があらわされている。また「養母による養育」では母マーヤー（Māyā・摩耶夫人）の亡き後、養育している伯母のマハー・プラジャーパティー（Mahā-prajāpatī・摩訶波闍波提）⁽¹³⁾の膝上で太子が抱きかかえられている。続く3つの場面にも体の小さい童子の姿で、三日月形頭光が確認できる。しかし、「学堂に入門」（図2）の場面では、7歳となった太子の姿はそれまでと異なり、髻を結び、三日月形はあらわされない⁽¹⁴⁾。そしてその後の仏伝図のなかでも太子に三日月形頭光の表現をみることはできない。すなわち、チャンディ・ボロブドゥールの「仏伝図」では、7歳以下の童子の頭部背後に「三日月形」が表現されるものと読み取れ、寺院の建立時期から8～9世紀頃にはこの傾向が表れていたことが考えられる。

また、この「仏伝図」とは別に、同寺院の『大方広仏華嚴経』「入法界品」（*Gaṇḍavyūha*）のレリーフの文殊菩薩像にもこの三日月形頭光をみることができ⁽¹⁵⁾。「入法界品」とはスタナ（Sudhana-śreṣṭhi-dāraka: 善財童子）が覚りを求め、文殊菩薩に指南をうけて、53（55）人の善知識⁽¹⁶⁾（仏道の導き手、師）を訪ねて回り、最後に普賢菩薩のもとで覚りを得るという内容を説いた經典である。

第二回廊主壁の「文殊の指南」⁽¹⁷⁾と、続く第三回廊主壁の「南詢後の楼閣での文殊の指南」⁽¹⁸⁾、また第四回廊欄楯の「善財童子が文殊菩薩の許に着く場面」⁽¹⁹⁾などに登場する文殊菩薩像の頭部背後に三日月形を確認することができる。「文殊の指南」（図3）は、善財童子が覚りについて文殊に尋ね、「南詢して人々に尋ね歩くように」と指南される場面である。構図は文殊の楼閣内、中央に文殊菩薩が配され、腹帯で左膝をく



図2 「学堂に入門」部分



図3 「文殊の指南」部分

くった遊戯坐で蓮華座上に坐している。そして画面向かって左側に、楼閣外に善財童子が立つ。文殊菩薩の右手は屈臂して自身の前方に施無畏印状にして置かれ、左ひじを左膝上につく。左手背後から蓮茎がのび、頭部左横の位置に、開敷蓮華上に梵夾が置かれた姿が彫刻されている。文殊の豪華な頭飾の背後、楕円頭光の内に三日月形が確認できる。文殊の像容は他のレリーフの尊像と比較し、ややためて肉感的に表現されている。次に「南詢後の楼閣での文殊の指南」では、文殊の楼閣内、中央に向かい合掌し低頭する善財童子が彫刻され、その前方中央には文殊が2頭の獅子が支える蓮華座に遊戯坐で坐している。文殊菩薩の頭部は文殊特有の髪型である三髻を思わせ、楕円頭光の内側に三日月形が確認できる。続く第四回廊欄楯のレリーフは、第二回廊、第三回廊と比較して規模が小さくなるが、文殊菩薩が表現され、明確に三日月形頭光を有している。このほか三日月形頭光が「入法界品」にみられるのは、第二回廊主壁「釈天王との邂逅図」⁽²⁰⁾の釈天王と、四回廊欄楯「弥勒の大法会」⁽²¹⁾の弥勒である。いずれも、その場面の前後のレリーフに彫刻された尊像の体形と比較して、腹が膨らんだ丸みを帯びた体躯で表現されている。また、このほかにも三日月形頭光を有する像の存在の可能性も考えられるが、本論では上記についてのべておく。

次に、チャンディ・ボロブドゥールから東に直線上約3Kmに位置する、チャンディ・ムンドゥット(Candi Mendut)にも作例があげられる。シャイレンドラ朝のインドラ王(Indra: 在位782-812)により、8世紀末頃の建立とされる。堂内には、インドネシア彫刻で最も優品とされる巨大石造像が三尊形式で安置されている。マレー半島のリゴール(Ligor)碑文⁽²²⁾によれば、「シャイレンドラ朝の王、ヴィシュヌと呼ばれる王によって、蓮華手菩薩、釈迦牟尼仏、金剛手菩薩を祀るチャンディを建立した」とあり、また、堂の外壁にあらわされた像が八大菩薩であるとする密教の見地からの研究がなされている⁽²³⁾。本堂入口に続く通路左右の側面に、向かい合うようにして男女尊が彫刻されており、それらの尊にむらがる多くの童子たちに三日月形光頭があらわされている(図4・図5・図6)。この男女の尊名については、女尊を鬼子母神、男尊をヤクシャ、毘沙門天とする先行研究がある⁽²⁴⁾。筆者は本堂の三尊形式が西インドのエローラに関連するものと考察をしていることから⁽²⁵⁾、西インドのアジャンター・エローラ石窟などにみられる本堂前に坐す男女神と同様、パーンチカ、ハーリティーではないかと推察する。いずれにしても、現段階で、男女尊に多くの童子たちが戯れるレリーフはインドネシアで他に類はみられず、童子の頭部背後に三日月形があらわされることを立証する貴重な資料といえよう。

以上、寺院のレリーフにあらわされた尊像の三日月形頭光は、7歳以下の童子、及び文殊菩薩に用いられる装飾と考えられる。



図4 女尊のレリーフ



図5 男尊のレリーフ



図6 図5の童子頭部部分

3. 鑄造像にみる三日月形（表1）

さて、次に三日月形頭光があらわされた鑄造像についてのべたい。現段階で確認できる作例は、財宝尊（Jambhala）と文殊菩薩（Mañjuśrī）であった（表1）。

まず、財宝尊については、現段階で総数が90軀が確認でき⁽²⁶⁾、すべてが青銅製、時代は8～13世紀頃、中部ジャワ、東部ジャワ地域に出土している。そのなかで明確に三日月形頭光を有する作例は6軀、8～10世紀頃にかけて中部ジャワ地域を中心に確認することができる。材質はすべて青銅製、総高は9.8～19.2cm、坐法は踏下げ坐が4軀と多く、次いで半跏趺坐1軀、輪王坐が1軀である。二臂像と四臂像がみられる。右手には球形の果実のをせ、左手にマンガースか袋を執る。財宝尊の象徴である宝壺を台座に配し、踏み下げ坐の場合、壺の上に足を置く作例が2軀にみられる。

一例をあげると、ジャカルタ国立博物館所蔵像（図7：表1、No.1）は、青銅製、総高9.8cm、推定制作年代が8～9世紀頃、出土地は中部ジャワ地域のボヨラリ（Boyolali）。頭部に髪髻冠を戴き、垂髪を両肩に垂らす。顔面に白毫を有し、耳飾、胸飾、腹帯、臂釧、腕釧、足釧をつけ、左肩から腹部にかけて聖紐をかける。上半身は裸形で太鼓腹をなし、膝上までの裙を着ける。右手に球形の果実（レモンか）

表1 三日月形を有する鑄造像

番号	尊名	出土地	所在地	推定年代 (世紀)	材質	総高 (cm)	生法	臂数	印相		天蓋・光背 頭光	台座	出典	所蔵番号
									右手	左手				
1	財宝尊	Boyoali (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	8~9	青銅	9.8	半跏跏坐	2	球形を握る	袋	無し	円形	No.8592, c221	
2	財宝尊	Wonosobo (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	8~9	青銅	19.2	踏み下げ坐	2	摩滅	袋か	無し	蓮華座 脚付き方形台	No.664, c199	
3	財宝尊	Yogyakarta (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	8~10	青銅	14.2	輪王坐	2	球形を握る	マングース	無し	円形 壺7つ	No.551b, 3424	
4	財宝尊	Yogyakarta (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	9~10	青銅	11.4	踏み下げ坐 壺上に右足	2	摩滅	マングースか	輪形頭光	方形盤	No.538, c194	
5	財宝尊	/	アムステルダム 国立博物館	9前半~10初	青銅	11.8	踏み下げ坐 壺上に右足	4	球形・輪宝	マングース・法螺貝	壺12	壺上に蓮華座 方形台	No.311, 1958	
6	財宝尊	/	ラデアイヤプスタカ 博物館	/	青銅	/	踏み下げ坐 壺上に右足	2	球形を握る	欠損	壺2つか	/	No.A619	
7	文殊菩薩 坐像	/	リンデン 州立博物館	8~10	銀	5.8	半跏跏坐	2	与願印	蓮茎 (開敷蓮華上梵夾)	無し	無し	③p.56, No.20	
8	文殊菩薩 坐像	/	リンデン 州立博物館	8~10	青銅	8.1	踏み下げ坐 壺上に右足	2	与願印	蓮茎 (華)	無し	無し	③p.57, No.21	
9	文殊菩薩 坐像	/	大英博物館	8~11	青銅	12.2	踏み下げ坐	2	与願印	台座背後に垂下	無し	蓮華座 方形台座	No.12-28, 25, B & M.	
10	文殊菩薩 坐像	/	Suaka Penninggalan 博物館	9前半~10初	青銅	9.8	半跏跏坐	2	与願印	定印 (開敷蓮華上梵夾)	有り・葉形光背	蓮華座 方形台	No.BG.1156	
11	文殊菩薩 坐像	/	ジャカルタ 国立博物館	/	青銅	12.3	半跏跏坐	2	与願印	台座背後に垂下	天蓋欠損 葉形光背	蓮華座 方形台座	No.c308	
12	文殊菩薩 坐像	/	ラデアイヤプスタカ 博物館	/	青銅	12.1	結跏跏坐	2	与願印	蓮茎 (開敷蓮華上梵夾)	輪形頭光	蓮華座 円形	No.A21	
13	文殊菩薩 坐像	/	アムステルダム 個人collection	/	青銅	11.3	半跏跏坐	2	与願印	蓮茎を握る (開敷蓮華上梵夾)	無し	楕円形の蓮華座	個人	
14	文殊菩薩 坐像	/	アムステルダム 個人collection	/	青銅	11.8	半跏跏坐	2	与願印	蓮茎を握る (開敷蓮華上梵夾)	天蓋欠損 十字形楕円光背	蓮華座 方形台	個人	

C.J.: 中部ジャワ地域

①Ira Soorwardoyo, *Treasure of the National Museum, Jakarta*, Baku Antar Bangsa, 1997. 東京国立博物館編『仏跡ボロボロとそれの周辺 インドネシア古代美術展』東京国立博物館, 1981年。

②Lunsingh Scheutler, Pauline C.M. and Klokke, Marijke J., *Divine Bronze: Ancient Indonesian Bronzes from A.D. 600 to 1600*, Brill, Leiden, 1998.

③Lohuizen-De Leeuw, J.E.van, *Indo-Javanese Metalwork*, Linden Museum Stuttgart, Stuttgart, 1984.



図7 財宝尊像



図8 文殊菩薩像



図9 図8の後頭部

をのせ、左手でマングースの首を握っており、マングースの口からは二条の宝があふれ出ている。台座は壺が放射状に7つ配された円形台座に蓮華座で、その上に右膝を立てた輪王坐で坐す。台座背後には光背用のほぞ穴が残っている。そしてこの像の頭部の背後には、左切っ先が欠損しているが、首の位置に三日月形が施され、その中央に、上から頭飾を結んだ紐が垂れている。

次に、文殊菩薩の作例についてみると、現段階で総数が27軀、銀製1軀を除き26軀が青銅製、時代が8～11世紀頃で、中部ジャワ、東部ジャワ地域で確認ができるなか、三日月形頭光を有する作例は8軀、8～11世紀頃にかけて確認することができる。材質はすべて青銅製、総高は5.8～12.3cm、坐法は半跏趺坐が5軀と多く、次いで踏み下げ坐が2軀、結跏趺坐が1軀である。右手はすべて与願印、左手は蓮華（開花・蕾）の上に梵夾をのせた茎を執る作例が多くみられる。

一例をあげると、中部ジャワのラディヤプスタカ (Radyapustaka) 博物館像 (図8：表1、No.12) は、青銅製、総高12.1cm、頭部は髻を結びあげ頭飾をつける。耳飾、胸飾、腹帯、臂釧、腕釧、足釧をつけ、上半身は裸形で裙を着ける。右手は与願印、左手は左膝に置き、その手は蓮茎を握る。その茎が左腕にからまりながらのび、左肩の位置で開花した蓮の上に梵夾が置かれる。台座は蓮華座で、その上に結跏趺坐で坐す。そしてこの像の頭部の背後にも三日月形 (図9) が首の位置に、輪光とともに施される。

以上のように、三日月形頭光は、铸造像では、財宝尊と文殊菩薩の2つに確認することができ、時代はそれぞれ8～11世紀頃の「中部ジャワ期」が中心であることが判明した。そして、財宝尊が総数90軀中、6軀であるのに対し、文殊菩薩が27軀中、8軀であることから、文殊菩薩において、三日月形頭光の割合が高いことが導き出せる。

表2 三日月形を有する石造像（单独尊）

	尊名	出土地	現所在地	推定年代 (世紀)	総高 (cm)	坐法	臂数	印相		光背	台座	出典	所蔵番号
								右手	左手				
1	蓮華手観音 菩薩坐像	Bebes (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	8-9	/	結跏趺坐か	2	欠損	左膝上 蓮華茎握る	爪方光背	蓮華座か(膝減) 方形台座	/	No.277
2	文殊菩薩 菩薩坐像	Yogyakarta (C.J.)	アムステルダム 国立博物館	8-10	183.0	半跏趺坐	2	欠損	欠損	Ω形光背	蓮華座 方形台座	/	No.MAK240
3	文殊菩薩 菩薩坐像	Candi Ploasan Lor	Candi Ploasan 南堂	9-10	約140.0	踏み下げ坐	2	右膝上で欠損	蓮華を握る 蕾上に梵夾・花	葉形の光背	蓮華座 右踏台が蓮華	/	/
4	文殊菩薩 頭部欠損	Candi Ploasan Lor	Candi Ploasan 北堂	9-10	約110.0	踏み下げ坐	2	右膝上で欠損	蓮華を握る 蕾上に梵夾	葉形の光背欠損	蓮華座	/	/
5	文殊菩薩 頭部のみ	Yogyakarta (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	10-11	29.5	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損	欠損	①No.8	No.518, 475
6	スーリヤ	Dieng (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	8	/	遊戯坐か	2	右膝上	左背後に垂下	円形頭光 方形	7頭の馬	/	No.203
7	カールツァイケイヤ	Yogyakarta (C.J.)	ジャカルタ 国立博物館	10	85.0	ガチョウに 乗る	2	ガチョウの 首	左膝上	爪形光背	方形台	②p.61	No.202
8	カールツァイケイヤ	C.J.	シカゴ美術協会	10	47.3	ガチョウに 乗る	2	右膝上	ガチョウの首	方形板 円形頭光	ガチョウの足 から下欠損	③78, 79	/
9	チャンドラ	Candi Gunung (E.J.)	ジャカルタ 国立博物館	11-12	79.5	半跏趺坐	2	定印 花をのせる	与願印 花をのせる	爪形 楕円頭光	蓮華座	④p.48, No.27	No.8456

C.J.: 中部ジャワ地域

E.J.: 東部ジャワ地域

①東京国立博物館編『仏跡ポロブドゥールとその周辺 インドネシア古代美術展』東京国立博物館、1981年。

②Tara Sosrowardoyo, *Treasure of the National Museum, Jakarta, Buku Antar Bangsa*, 1997. 東京国立博物館編『仏跡ポロブドゥールとその周辺 インドネシア古代美術展』東京国立博物館、1981年。③Pal, Pratapaditya, *A Collecting Odyssey: Indian, Himalayan, and Southeast Asian Art from the James and Marilyn Alsdorf Collection*, Art Institute of Chicago in association with Thames and Hudson, New York, 1997.

④国立博物館編『インドネシア古代王国の至宝』東京国立博物館、1997年。

4. 単独の石造像みる三日月形（表2）

さて、石造の単独像にも三日月形頭光が確認できたので、作例をあげてのべたい。現段階では文殊菩薩坐像4軀、蓮華手観音坐像1軀、カールツェイケイヤ（Kārttikeya）2軀、スーリヤ（Surya）、チャンドラ（Candra）が各1軀の計9軀が確認できる。

まず文殊菩薩坐像であるが、顔や光背の造形、法量から、すべて中部ジャワ地域のチャンディ・プラオサン（Candi Plaosan）に関連する像と考えられる。この寺院は、ロロ・ジョングランを中心とするヒンドゥー教と仏教の遺跡群が密集する地区の北東に位置する。北のロル（Lor）と南のキドゥル（Kidul）の2つからなる遺跡で、ロルには北堂・南堂がある。建立には諸説あるが、ロロ・ジョングランを建立したマタラーム朝、ラカイ・ピカタン王（Rakai Pikatan）とその妃のプラモーダヴァルダニー（Pramodavardhani：シャイレンドラ朝のサマラトゥング王の娘）が建立に関わったものと考えられている⁽²⁷⁾。

ロルの2つの堂には、各3室（北室・中央室・南室）あり、各室には台座が3つ設けられ、中央の像は亡失するが、両脇に踏み下げ坐の菩薩像が配され、現在12軀が残存する。すべてが石造で、踏み下げ坐の姿勢をとる。そして尊像の配置順は、残存する像から北堂・南堂でほぼ共通していると考えられる。各堂の南室の正面右側には、文殊菩薩像（図10：北堂）（図11：南堂）がそれぞれ1軀安置され、いずれも後頭部に三日月形頭光を確認することができる。両尊ともに、右手を欠損しているが、鑄造像と同様に左手に蓮茎を執り、その茎先は像の左肩の位置で、蓮華上に梵夾が置かれている。

チャンディ・プラオサンの各堂における六軀の菩薩の尊名については諸説あるが、文殊の同定については一致をみている。筆者は南室から順に、文殊、地蔵、金剛手か、観音、普賢、弥勒と考察した⁽²⁸⁾。先にのべたチャンディ・ムドウトの本堂外壁に彫刻された密教の八大菩薩とされる像のうちの6軀が1グループとして、この寺院では安置されている可能性が高い⁽²⁹⁾。文殊菩薩は、インドネシアにおいて密教を考察するうえで重要となる尊像である。よって、この「三日月



図10 北堂の文殊菩薩像



図11 南堂の文殊菩薩像

形頭光」が尊名同定に果たす役割は大きいといえよう。

現在北堂の隣にある野外の北テラスには、損傷が激しい21軀の坐像（結跏趺坐、または半跏趺坐）の尊像群が置かれおり、そのなかに三日月形頭光を有した尊像（図12）が確認できる。北堂、南堂の各文殊菩薩像にみられた、梵夾を載せた蓮華の持物はみられないが、この三日月形頭光を論拠として文殊菩薩と推察すると、北テラスに置かれる他の像には地藏、金剛手か、観音、弥勒がみられることから、北堂・南堂の六菩薩の2つのグループの他に、少なくとも、もう1グループが存在していた可能性を指摘できる。また、この北テラスの文殊菩薩と考えられる同系の像は、アムステルダム国立博物館所蔵の石造、単独像に確認することができる（表2、No.2）⁽³⁰⁾。三日月形頭光を有するが、左側に梵夾をのせた蓮華の持物はみられない。同館の資料ではチャンディ・プラオサン出土の文殊菩薩と記載があり、火焰状の文様を外周する独特の光背と、半跏趺坐の姿勢、像の様式は北テラスの文殊菩薩と推察する像と特徴を同じとしている。



図12 北テラスの三日月形を有した像

また、同寺、チャンディ・プラオサン出土とされるジャカルタ国立博物館所蔵（表2、No.5）、の頭部のみ残存する作例がある。三日月形頭光が確認でき、顔の表現、際髪から顎のサイズはチャンディ・プラオサンの南堂尊像に近い⁽³¹⁾。このチャンディ・プラオサンでは単独像で文殊菩薩像が集中して造像されたのか、もしくは、文殊のほかには法量・様式に近い尊像で、地藏、金剛手、観音、普賢、弥勒が確認できれば、この寺院では六尊で構成されるグループが複数存在していたことになる。これについては今後の課題としたい。



図13 スーリヤ

次に文殊以外の三日月形頭光を有した石像について挙げたい。蓮華手観音坐像（表2、No.1）は、博物館資料では中部ジャワ地域出土の8～9世紀頃とされるが全体に摩滅が激しい。詳細については課題とする。次にスーリヤ（表2、No.6、図13）であるが、8世紀頃、中部ジャワ地域、ヒンドゥー教がさかんであったディエン

で出土している。サンスクリット語で太陽を意味するがスーリヤに三日月形があらわされるのは、月を意味するチャンドラとの対比であろうか。一方、東部ジャワ地域で11世紀頃のチャンドラ（表2、No.9、図14）にも三日月形頭光が確認でき、これは尊名から由来するものと考えられる。



図14 チャンドラ



図15 カールツィケヤ

この他、カールツィケヤ（表2、No.7、図15）にも2軀が確認することができた。青年の姿で造像されることが多い尊像であるが、三日月形頭光との関連性について今後の課題となろう。

5. 文殊にみる童子性

以上、寺院のレリーフ、鑄造像、石像に三日月形頭光をみてきたが、レリーフでは7歳以下の童子の後頭部に表されることが確認でき、また鑄造像では財宝尊、文殊菩薩にみることもできた。また石像でも確認できる9軀中、5軀と約半数が文殊菩薩であることから、文殊の場合、この三日月形頭光が表現されることが多いことが導き出せる。この文殊菩薩について、経典からその性格をみておきたい。

まず、インドネシアに文殊に関連する要素をみると、中部ジャワ地域のクルラク碑文（Kelurak）碑文があげられる。すなわち「Śaka 暦704年（782）、中部ジャワのプランバナ地域域のクルラクにシャイレンドラ朝の王インドラがベンガル出身の王師クマーラゴーシャ（Kumārāghoṣa）に文殊菩薩像を造像させた」⁽³²⁾とあることから、8世紀頃には中部ジャワ地域において文殊信仰が始まっていたと考えられる。

次に、経典に文殊菩薩をみてみると、*Sādhanamālā*（サーダナマラー）⁽³³⁾には、右手にあらゆる愚かさを断ち切る最も大事な智慧の剣を執り、左手には、方便より生じた梵夾『般若経』を持つ（Arapacana）⁽³⁴⁾。転法輪印を結び、般若波羅蜜（梵夾）をのせた青蓮を持ち、獅子に乗り、遊戯に足を投げだす（Mañjuvara）⁽³⁵⁾。右手与願

印、左手に青蓮華上梵夾を乗せる（Siddhaikavira）⁽³⁶⁾などがあげられ、右手が与願印、また左手の梵夾が『般若経』であることがわかる。

また、漢訳經典では『八大菩薩曼荼羅經』⁽³⁷⁾に、「五髻童子形にして、左手青蓮華を執り、花中に五股金剛杵あり。右手、与願を作し、身金色、半跏にして坐す。」とあり、また『金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩供養儀軌』⁽³⁸⁾に「頂に五髻を想え。右手、智劍を持し、左手、青蓮華を執る。花上に般若波羅蜜夾あり。」、『陀羅尼集經』⁽³⁹⁾に「蓮華座に結跏趺坐し、右手說法印、左手胸前、像身童子形、身は黄金色、白色の天衣、・・・白色にして頂背に光あり、七宝の瓔珞、宝冠、天衣種々莊嚴し、獅子に乗ず」とあり、また『文殊師利宝蔵陀羅尼經』⁽⁴⁰⁾では、「童子の相貌、金色孔雀に乗騎」、『一字頂輪王經』では「左手胸前に青優鉢羅華を握り、右手上に屈して内に向け掌を揚ぐ」とあり⁽⁴¹⁾、『大毘盧遮那成仏神變加持經』⁽⁴²⁾では「身鬱金色にして五髻冠、その頂きにあり、童子形の如し、左手青蓮華、上に金剛印をなす」、『八大菩薩曼荼羅經』⁽⁴³⁾では「五髻童子形にして、左手青蓮華を執り、花中に五股金剛杵あり。右手、与願をなし、身金色」、『金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩法』⁽⁴⁴⁾には「身鬱金色の如し。種々の瓔珞、その身を莊嚴す。右手に金剛劍を握り、左手梵夾を執る。」とあり、『金剛頂經瑜伽文殊師利菩薩供養儀軌』⁽⁴⁵⁾には「頂に五髻を想え。右手、智劍を持し、左手、青蓮華を執る。花上に般若波羅蜜夾あり。」とある。これらをまとめると、以下が文殊の特徴といえよう。すなわち、1. 童子形であり、2. 身色一黄金系統の色、3. 髪型は五髻（多）、一髻・八髻がなされる、4. 坐法は結跏趺坐・半跏坐・孔雀座・獅子座、5. 印相・持物は刀劍・梵夾・青蓮華・与願印（多）・說法印というものである。

以上から、文殊菩薩は、童子形をなし、童子のように髻を結うことが特徴といえよう。また、ジャカルタ国立博物館蔵所蔵で、銀製、中部ジャワのスマラン（Semarang）出土、総高が29cmとインドネシア出土の铸造像の文殊菩薩像は、童子のように一髻に結び、右手を与願印、左手に蓮華を執る典型的な文殊菩薩坐像であるが、特異な胸飾りを有する（図16）⁽⁴⁶⁾。強靱な動物の牙、または爪を用いたと考えられ、仏像には似つかわしくない。これは童子の性格をもつ文殊菩薩のため、危険なものへの威嚇、または病気や災厄などから保護するための魔除けの意味が込められ、掛けられている可能性が考えられる。



図16 独特な胸飾りの文殊菩薩像

インドネシアにおける三日月形頭光を有する尊像について（伊藤）

6. インドネシアにおける三日月形に類似した飾り

8～9世紀頃の中部ジャワ、ジョグジャカルタ（Yogyakarta）、土器の瓶から金製のマスク、胴体とともに出土した金製の三日月形の装飾が早期であげられる。また、1936年にチャンディ・ゲバン（Candi Geban）付近から青銅器の容器からジャグジャカルタで出土したものと類似する金製の三日月形の装飾が発見された。中央には半貴石が埋め込まれていたことから、頭部背後に飾るものとは考えにくい。これらの三日月形は儀式的な要素をもっていたものと推測されている。また、三日月形が明確にネックレスとして用いられていた例もあるが⁽⁴⁷⁾、これについても頭光との関連性を検証することは難しい。

インドネシアにはブランコン（blangkon）といって14世紀頃から王族が頭部の背後に三日月形の飾りの帽子を付けるようになる⁽⁴⁸⁾。この王族と、寺院のレリーフや尊像でみられた三日月形頭光との関連性も、現在では論証が困難と思われる。

結論

以上、インドネシアにおける尊像の頭部背後の三日月形装飾、すなわち「三日月形頭光」について、作例を紹介し、考察を行った。

まず寺院では中部ジャワの8世紀後半から9世紀中頃の建立とされるチャンディ・ボロブドゥールにみることができた。第一回廊主壁のレリーフ「仏伝図」において、「誕生」から「学堂に入門する」まで一連の場面の考察から、7歳以下の童子にあらわされるものと考えられ、また、ボロブドゥールから一直線上、東に約3kmのチャンディ・ムドゥットにも、本堂に続く通路の両側、男女尊のレリーフで各尊に戯れる多くの童子に明確にその形状が確認できた。これらから、三日月形頭光は、童子に表されることが導きだされ、寺院建立の時期から、8～9世紀頃には、この傾向が表れていたことが考えられる。

また、チャンディ・ボロブドゥールの第二回廊主壁などに彫刻される『大方広仏華嚴経』「入法界品」の場面から、文殊菩薩の登場場面で、文殊と想定される尊像の多くに三日月形頭光を確認することができた。

続いて、鑄造像については、文殊菩薩坐像が8軀、財宝尊が6軀確認でき、文殊菩薩は現段階で約3割が三日月形頭光を有していることが判明した。石造の単独像についても、三日月形頭光を有する像は現段階で9軀が確認できるが、そのうち5軀が文殊菩薩像と、全体の約半数を占めている。これら鑄造像・石像の資料から、三日月形頭光は、インドネシアの文殊菩薩の特徴の一つとしてあげられることが導き出される。

三日月形頭光が文殊菩薩を示す特徴の一つであるとして考察をおこなうと、中部

ジャワ地域、チャンディ・プラオサン、祠堂外の北テラスの仏像群の1軀は文殊菩薩と推察することができる。現在、同寺院には密教の八大菩薩のうちの6軀の菩薩が2グループあるが、そのほかにもう1グループが形成されていた可能性を指摘することができる。インドネシアの密教を考察する上で、文殊菩薩は重要な尊像であり、この三日月形頭光は、文殊菩薩を判断する指標となり得る。しかし、すべての文殊菩薩に三日月形頭光があらわされるとは限らず、チャンディ・ボロブドゥールの文殊菩薩の場面のレリーフやチャンディ・ムンドウトの本堂外壁に彫刻された八大菩薩の1軀にも文殊菩薩に三日月形頭光はみられない。したがってこの尊像の確実な該当条件とはいえないことも考慮しておくべきであろう。

このように、三日月形頭光は、寺院のレリーフ、鑄造像・単独の石造像において、中部ジャワ地域を中心に、東部ジャワ地域までの8～12世紀頃にかけて表された装飾であり、基本的に「童子」を意図する傾向が強いものと導き出された。それは文殊菩薩も経典などで説かれているように、童子の要素を持ち合わせているからであり、それが起因し、文殊菩薩の装飾として多用されているものと考えられる。このことは、当時のインドネシアで、文殊菩薩が童子に関連することを理解していた可能性を示唆するものと思われる。

この童子形・文殊菩薩といった2つの系統の像以外には、レリーフでは釈天王と弥勒菩薩、鑄造像では財宝尊、石造像ではカールッティケイヤ2軀、スーリヤ1軀、チャンドラ1軀等に三日月形頭光が確認できる。スーリヤ、チャンドラに関しては月に関連することが理由に考えられる。その他の像については、いずれも造像表現は若々しく、全体に丸みを帯びた体軀であらわされていることが共通しているが、三日月形との関係性については現段階で明快な理由をみつけられない。この疑問を含め、なぜ「三日月」の形状が選択されたのかについても今後の課題としたい。

註

- (1) 岩本裕『アジア仏教史 インド編Ⅵ 東南アジア』佼成出版社、1973年、264頁。
「ジャワ仏教の資料は相当に豊富で、その研究に事かかないのであるが、なお不明な点が多く、未だに点の羅列で終わっている感がないではない。特にその初期5世紀から10世紀までについてはほとんど判らないと言ってよい。」
- (2) 松長恵史『インドネシアの密教』法蔵館、1999年。伊藤奈保子『インドネシアの宗教美術—鑄造像・法具の世界—』法蔵館、2007年。改訂版、2019年。
- (3) 東京国立博物館編『インドネシア古代美術展：仏跡ボロブドゥールとその周辺』共同通信社、1981年、No.8。文殊菩薩像頭部、高さ29.5cm、中部ジャワ、チャンディ・プラオサン、「右肩後方の三日月から判断して、文殊菩薩の像とみられる。この三日月形状の装飾はカールッティケイヤの若者とか・中略・、子供たちが身につけ

インドネシアにおける三日月形頭光を有する尊像について（伊藤）

ていたものである。」

- (4) 有吉巖編訳、N.J.Krom 著『インドネシア古代史』天理南方文化研究所監修、1985年、37頁。朴亨國「インドネシアの美術」前田耕作監修『カラー版東洋美術史』美術出版社、2000年、88頁。
- (5) 東部地域、Tugu 平地から出土した楕円形大石碑文。一対の人間の足跡と、その下方にパッラヴァ文字をもってサンスクリット語の韻文が銘刻される。タールマーナガラ（Tārumānagara）を都とした支配者であるプールナヴァルマンの足であり、ヴィシュヌに等しいとする。
Sarkar, Himansu Bhusan, *Corpus of the inscriptions of Java (Corpus inscriptionum Javanicarum), up to 928 A.D.* Vol.I, Firma K. L. Mukhopadhyay, Calcutta, 1971, p.1.
岩本裕、前掲書、30頁、挿7。佐和隆研編者『インドネシアの遺跡と美術』、日本放送出版協会、1973年、70頁、第17図。有吉巖編訳、N.J.Krom 著、前掲書、20頁、第2図。
- (6) Nos.8416, 7974. ジャカルタ国立博物館蔵。No.7974: Cibuyaya, Karawang 出土、東京国立博物館編『インドネシア古代王国の至宝』図録、インドネシア・日本友好祭・97事務局、1997年、18頁。
- (7) 大正蔵50巻、『高僧伝』第3に、仏教僧、求那跋摩が師子国（セイロン）から閩婆国に至り、婆多伽の尊敬をうけ、そののち広州に至るとある。338～339頁。
- (8) No.233a. ジャカルタ国立博物館蔵。Jambi 出土、172cmの石造如来立像。東京国立博物館編、前掲書、1997年、20頁。
No.247/D215. ジャカルタ国立博物館蔵。Palembang 出土、186cmの石造四臂観音立像。東京国立博物館編、前掲書、1997年、19頁。
- (9) Śaka 暦700年（778年）。Sarkar, *op.cit.*, p.34.
- (10) 伊東照司『インドネシア美術入門』雄山閣、1989年、33～34頁。
- (11) Krom Nicolaas Johannes, *Barabudur: Archaeological Description*, Rinsen Book, 1993, Series I.a.Plates. XIV.28, XV.30, XVI. Nos.31,32, XVII.33,34, XVIII. No.35.
宇治谷『甦るボロブドゥール』アジア文化交流センター、1987年、80～84頁。
- (12) Gotama Siddhattha（ゴータマ・シッタッタ）パーリ語
- (13) Mahā-pajāpati（マハー・パジャーパティ）パーリ語
- (14) Krom, *op.cit.*, Series I. a. Plate XIX.37. 宇治谷、前掲書、85頁。
- (15) 大正蔵 第9、10巻、Nos.278, 279等。
- (16) 善き友、導き手。大正蔵、第9巻、35頁など。
- (17) Krom, *op.cit.*, Series II.Plate VIII.16. 宇治谷、前掲書、244頁。
- (18) Krom, *op.cit.*, Series III.Plate VI.12. 宇治谷、前掲書、314頁。
- (19) Krom, *op.cit.*, Series IV. (B). Plate XI. 51. 宇治谷、前掲書、378頁。
- (20) Krom, *op.cit.*, Series IV. (B). Plate XI.27. 宇治谷、前掲書、247頁。

- (21) Krom, *op.cit.*, Series IV.(B).Plate IX. 43. 宇治谷、前掲書、376頁。
- (22) Coedès, George, *Javanese period in Sumatran history*, in BEFEO vol.18, Ecole Française d' Extrême Orient, Paris, 1918, pp.23-32. 岩本裕、前掲書、36頁。
- (23) 伊東照司「不空金剛とチャンディ・ムンドゥット」『インドネシア—その文化社会と日本—』早稲田大学出版部、1975年、山本智教訳、ロケーシュ・チャンドラ著、「胎藏界曼荼羅としてのチャンディ・ムンドゥット」『密教文化』第155号、高野山大学出版部、1986年等。伊藤奈保子「チャンディ・ムンドゥットの三尊像についての一考察」『豊山教学大会紀要』第36号、豊山教学振興会、2008年。
- (24) 伊東照司氏は毘沙門天と鬼子母神。前掲書、1989年、26頁、図版28、29。松長恵史氏はヤクシャと鬼子母神。前掲書、114頁、図版31、32。
- (25) 伊藤奈保子 前掲書、2008年。
- (26) 伊藤奈保子「インドネシアの財宝尊の現存作例について」『密教図像』第23号、法蔵館、2004年、100~116頁。
- (27) 野口英雄「中部ジャワの仏教遺跡—北プラオサンの方位について—」『東南アジア研究』第6巻第4号、京都大学アジア研究センター、1969年、339~358頁。
- (28) ITO, Naoko, *On the Gropes of Buddhist Statues Outside the temples in Candi Plaosan, Central Java*, Indogakubukkyogaku kenkyu 印度學佛教學研究, 67-3(148), 2018.
- (29) 松長恵史、前掲書、163頁。
- (30) No.AK-MAK-240. The Bodhisattva Manjushri, c.800-c.900, h 138cm x w 90cm x d 60cm x w663kg.
- (31) 注3 参照
- (32) Sarkar, *op.cit.*, pp.41-42.
- (33) Bhattacharyya, Benoytosh(ed.), *Sādhnamālā*, Gaekwad's Oriental Series No.26, Oriental Institute, Baroda, 1968.
- (34) *Ibid.*, *Muktakenārāpacanasādhana*, No.56, pp.115-119.
- (35) *Ibid.*, *Vādirātsādhana*, No.54, pp.110-112.
- (36) *Ibid.*, *Siddhaikavīrasādhana*, No.67, pp.137-140.
- (37) 大正蔵20巻 675頁下
- (38) 大正蔵20巻 719頁上
- (39) 大正蔵18巻 839頁上
- (40) 大正蔵20巻 794頁上
- (41) 大正蔵19巻 230頁下
- (42) 大正蔵18巻 8頁上
- (43) 大正蔵20巻 675頁下
- (44) 大正蔵20巻 705頁上
- (45) 大正蔵20巻 719頁上

インドネシアにおける三日月形頭光を有する尊像について（伊藤）

- (46) No.5899, 東京国立博物館編、前掲書、1997年、104頁。
伊藤奈保子、前掲書、2007年、2019年、図116。
- (47) Fontein, Jan, *The Sculpture of Indonesia*, National Gallery of Art, Washington D.C.,1990, p.282.
Miksic, John, *Old Javanese Gold: The Hunter Thompson Collection at the Yale University Art Gallery*, Yale University, London, 2011, p.150.
- (48) Soegeng Toekio, M., *Tutup kepala Tradisional Jawa*, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Jakarta, 1981, p.110.

（広島大学大学院文学研究科）